

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2002

課題番号：22520670

研究課題名（和文） 戦後保守思想の形成に関する史的研究－国家主義・皇国主義との関係を中心に－

研究課題名（英文） The historical research on the formation of post-war conservative idea –The relationship between nationalism and imperialism –

研究代表者

河島 真（KAWASHIMA MAKOTO）

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：00314451

研究成果の概要（和文）：戦前は師範学校長、高等女学校長を、戦後は私立中学・高校長、短期大学教員を歴任した人物の思想を取り上げ、こうした在野知識人における個人より国家や天皇・皇室に高い価値を置く保守思想は、戦中に生徒や国民を鼓舞して戦争に駆り立てたことについての反省が薄く、むしろ戦後の教職追放を不本意で苦痛な体験として自覚することで戦前から戦後に持ち越されるが、その言説は戦後高まった功利主義・利己主義的な風潮への批判の言説として新たな役割を与えられ、質的な転換を遂げた上で戦後社会に一定の位置を占めたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：NIGAURI ESABURO served Normal School length and Higher girls' school length, before world war II, and served Junior high school and Senior high school principal, and Junior college teacher after world war II. His conservative ideas put a high value on the nation and emperor than individual. He has no remorse about what you drove to the war and the general public to students during the war. He was conscious experience as painful unwilling to teaching post-war expulsion. So his conservative ideas were carried over after the war. His ideas, accounted for a new position in postwar society on given a new role as a discourse of criticism of the climate expedient manner, egoism, and has undergone a qualitative transformation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000円	300,000円	1,300,000円
2011年度	900,000円	270,000円	1,170,000円
2012年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
年度			
年度			
総計	2,700,000円	810,000円	3,510,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：歴史学、日本近現代史、思想史、保守思想、国家主義、皇国主義

1. 研究開始当初の背景

| (1) 戦後思想史の研究は、戦争＝敗戦経験の

もたらした影響とその変容を軸とし、戦後思想を通史的に俯瞰した小熊英二氏の研究が世に出された 2000 年代に入って、新しい段階を迎えたといえる。小熊氏は戦争＝敗戦経験を重視して、それが国民に受容される戦後の思想形成につながったことを重視するが、他方で戦前の国家主義・皇国主義の流れを継承する保守思想も厳然として存在したことは事実である。残念ながら、そうした戦後保守思想の形成を正面から取り扱った研究はいまだ少なく、研究上の課題であると考えられた。

(2) しかもこれまでの思想史の研究は、学者、評論家、ジャーナリストとして新聞や総合雑誌などで論陣を張り、世論形成に一定の影響力を持った知識人＝頂点思想家の思想体系を対象とすることが多かった。しかしそれでは国民一般の思想状況（あるいは精神状況）をとらえることは難しく、頂点思想家とは別に国民生活に密着したところではぐくまれる在野知識人の思想に光を当てる必要があると考えられた。

2. 研究の目的

(1) 戦前の国家主義・皇国主義が戦後の保守思想へと引き継がれたのか引き継がれなかったのか、もし引き継がれたとすればどのようにしてそれが可能となり、またその場合に戦争＝敗戦経験はどのように位置づけられるのか、そしてそうした保守思想は戦後においていかな根拠でもって存在し得たのかを明らかにすること。

(2) 在野知識人の思想形成に光が当てられなかったのは、史料にめぐまれなかったところにもその一因がある。そこで課題研究で活用した史料を翻刻し、その史料情報を個人情報保護の原則から逸脱しない範囲で公開すること。

3. 研究の方法

(1) 在野知識人の事例として、東京高等師範学校を卒業、同専攻科を修了し、戦前は師範学校長、高等女学校長等を、戦後は私立中学・高等学校長、短期大学教員を歴任した苦瓜恵三郎という人物の思想遍歴を取り上げる。恵三郎は教育者として生徒・学生を指導しただけでなく、1930 年代以降の官製運動に深く関わり、講演や執筆を通じての啓蒙活動も活発に行った在野知識人の典型と評価で

きる。

(2) 遺族からの寄贈により、神戸大学附属図書館大学文書史料室で保管されている苦瓜恵三郎関係史料のうち、自筆の回顧録、日記等を翻刻し、公刊されている図書、私家版で印刷された冊子などと合わせて分析する。また、彼が在職した学校やその同窓会等を調査し、彼の執筆した原稿の収集に努める。

(3) 翻刻史料とその分析を中心とする報告書を作成し、史料情報を個人情報保護の原則から逸脱しない範囲において、Web 上でも公開する。

4. 研究成果

(1) これまで検討されて来なかった苦瓜恵三郎の自筆史料としては、1932 年から 1940 年までの日記（10 冊）、1956 年から 1958 年までの「余生記録」、1967 年から 1971 年までの日記（5 冊）などが残されており、これらを翻刻した。さらに、1958 年に刊行された自伝『私の教育遍歴』（理想社）の元になったと思われ、そのおよそ 3.5 倍もの内容を誇る自筆の『回顧七十年』（全 10 編）全編の翻刻も行った。この史料は、在野知識人の思想遍歴を分析する上での第一級史料である。

(2) 苦瓜恵三郎が校長を務めた石川県師範学校、山口県師範学校、第一神戸高等女学校を前身とする金沢大学、山口大学、兵庫県立神戸高等学校等において史料調査を行い、当時の校友会誌等に掲載された恵三郎の原稿を収集した。

(3) 以下、研究の結果明らかになった成果をまとめておく。苦瓜恵三郎は、「日本のペスタロッチ」と呼ばれた兵庫県姫路師範学校長・野口援太郎に私淑したことにみられるように、元来、権威や権力に対して批判的なりべるな思想の持ち主であった。しかし、東京高等師範学校専攻科在学中に、哲学者・紀平正美の講義を聴講したことをきっかけとして国家・皇室を重んじる「日本主義者」へと転じ、十五年戦争期には時流に乗って「日本主義」に関する活発な講演活動や執筆活動を行うに至ったことが明らかになった。

(4) しかし恵三郎の戦後における国家主義・皇国主義は、体系化された一個の思想としてあったわけではなく、功利主義的・利己主義的に映る戦後の世相を批判する規律主義的

な言説として機能するものであった。すなわち、君＝民＝国家がひとつの環をなしている状態を理想と考え、跛行的な社会状況を批判する論理としてそれが唱えられたのであり、戦前の国家主義・皇国主義そのままの継続ではなく、質的变化を遂げていたことが明らかになった。

(5) 教育者としての恵三郎は、労働と共同生活を重視していた。石川県師範学校校長時代には修養道場鞍ヶ嶽明倫堂を、山口県師範学校校長時代にも修養道場奉公塾を建て、生徒には一定期間そこで共同生活を営ませながら、労働に従事する教育を行った。その趣向は、戦後三田学園中学・高等学校長として復職してからの、遠方から通学する子どもを校長宿舎に住まわせるという指導方式へと引き継がれている。こうした国民としての規律を追求する指導が、戦後においても規律主義的な国家主義・皇国主義を呼び込む素地ともなっていたことが推測された。

(6) 戦前の国家主義・皇国主義が、社会状況への批判の論理として質的变化を遂げながらも、戦前から戦後へと持ち越された要因のひとつとして、彼の戦争体験が反省を伴うものになっていなかったことは重要である。彼の記録には、教育者として生徒に戦争協力を訴えながら、戦死を含めて戦争で犠牲となった教え子のことが一言も記されていない。彼にとっての戦争体験は、校長として勤労働員や学校疎開に尽力したこと、そして自らは疎開先で周辺住民との関係に苦勞したこと、これらにほぼ尽きており、そのことが戦前の言動への反省の契機を失わせてしまったものと考えられた。とりわけ、彼が教職追放になるきっかけとなった『戦時婦女訓』（健文社、1943年、文部省推薦図書）は、最後まで恵三郎の自慢の書として自覚されていた。

(7) そのことの裏返しとして、恵三郎の人生で最大の苦難は、戦争ではなく戦後の「教職追放」であった。それは、みずから招いたことでありながら、そうとは意識されずに、占領軍と自分の業績を正しく評価できない無能な審査委員による、いわれのない不当な処分と受け止められた。そうである以上、彼にとって戦後民主主義は否定すべき対象ではあっても、新たに獲得すべき価値ではなかったと考えられた。

(8) 小熊英二氏は、戦争＝敗戦の体験を深刻に受け止め、それを否定的媒介として生成し

てきたものとして戦後思想を捉えたが、苦瓜恵三郎においては、「戦争」体験ではなく「戦後」体験のもたらした意味の大きさこそが重要であり、それが彼の戦後思想を補強したといえる。これもひとつの戦後思想の立ち上がり方であり、戦後思想の研究に当たっては、戦争経験だけでなく戦後経験のあり方も考慮に入れなければならないことが明らかとなった。

(9) 苦瓜恵三郎は、姫路師範学校校長として在職中に、日本主義者・安岡正篤を中心とする国維会という団体にかかわっていたことが知られている。国維会の理事には、旧姫路藩主・酒井家の酒井忠正が加わっており、姫路には名教会という国維会の支部と評価できる団体が組織されていた。恵三郎の戦前の日記から、その活動の実態がはじめて明らかになった。

(10) 国維会は安岡正篤のほかは内務官僚を中心とする団体であった。国維会に先立ち、内務官僚を中心として結成され、国維会より長く活動した団体として新日本同盟があるが、その地方支部の実態を明らかにする論文を執筆した。

(11) 研究の総括に当たって、史料の分析結果と翻刻史料の一部を掲載した400頁の報告書を作成した。また、史料情報を公開するWebページを設けたが、史料には苦瓜恵三郎を取り巻く人々への毀誉相混じった記述が随所に見られ、Webには史料解説等をまず掲載し、翻刻史料の公開は、この問題を処理した後に漸次的に行うこととした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 河島真、新日本同盟の基礎的研究、神戸大学文学部紀要、査読無、2013、pp. 37-74

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.lit.kobe-u.zu.jp/~mkawa/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河島 真 (KAWASHIMA MAKOTO)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：00314451

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：